

学校だより 希望の鐘

ひとつのつぼみはいちどしかひらかない



八 戸 市 立 小中野中学校

平成28年8月24日(水)

No.56

文責：校長
工藤聡

リオオリンピックで感じたこと

31日間の夏休みが終わりました。みなさんにとっては、どのような夏休みだったのでしょうか。さて、2学期のスタートにあたり、みなさんに「リオデジャネイロのオリンピック」で感じたことについて話をしたいと思います。

夏休みは、ちょうどリオ五輪の期間に重なったため、私も夜遅くまで起きて、その熱戦をリアルタイムで見っていました。私がオリンピックを意識したのは、小学校1年生の時の東京五輪で、それ以後13回のオリンピックを見て来ていますが、世界の大舞台で、これほどまでに日本選手が躍動・活躍するのは初めてだと思います。かつての日本選手は、期待やプレッシャーに押し潰されて、持っている力を発揮できないことが多かったような気がします。それが今回は、レスリング女子やバドミントンのタカマツペア、体操男子団体や内村選手など、大逆転につぐ大逆転でメダルを獲得しています。特にすごかったのは、陸上競技のトラック種目で88年ぶりに銀メダルを獲得した、男子400mリレー（山県・飯塚・桐生・ケンブリッジ）の4人です。一人ずつの自己ベストタイムの合計では、到底（トウテイ：とても。）かなわないアメリカやカナダを退け、金メダルを獲得したジャマイカにも肉薄（ニクハク：きびしくせまること。）できたのは、バトンパスの技術と、それを可能にしたチームワークだったのだと思います。チームワークといえば、シンクロです。シンクロのチームは8人で演技をするのですが、今回の日本チームは9人で構成されていたそうです。控え選手の林愛子さんは一人だけ試合で泳ぐことはできませんでした。銅メダルを祝福するテレビ番組にも、もちろん出演しませんでした。それでも、つらい練習に耐えて、サブのメンバーとしてチームを支えてきたからこそ銅メダルだったのです。

日本選手の勝利後のインタビューでは、どの選手も異口同音（イクドウオン：くちをそろえて同じことを言うこと。）に、自分を支えてくれた周囲の人たちへの感謝の言葉を口にしていました。シンクロで2つの銅メダルを獲得した三井選手は、「地獄のような練習だった」と表現していました。チームに出場した箱山選手は、審判にいい印象を持たれないという理由で、八重歯を抜くほどのこともしたのだそうです。どの選手も、様々な試練（シレン：決心や技量を試すこと。）に耐え抜いて得た勝利だったのではないかと思います。さらに、メダルを手にした選手のインタビューに共通していたのは、次の2つでした。

1つは、明確な目標を持って、ひたむきに努力してきたということです。それが、厳しい練習にもビハインドを背負った時の苦しい試合中にも耐えうるメンタルの強さを生んでいたのだと思います。

2つ目は、体力や技量だけではなく、人間性が磨かれていて素晴らしかったということです。それが、第一声の周囲の人たちへの感謝の言葉に顕著（ケンチョ：明らかに目立つこと。）に表れていました。一戦一戦への真剣さやチームワークをも生んでいると思いました。

この2つは、これからのみなさんにとっても、大いに学ぶべきことではないでしょうか。

伊調選手の女子個人種目での史上初めての五輪4連覇の快挙を称える、19日のデーリー東北新聞に、「才能だけではなく。陰で積み重ねた努力が強さの根源にある」という記事が掲載されていました。それは、オリンピックに出たスポーツ選手だけではなく、みなさんにもあてはまると思います。我々が胸を熱くして感動したのは、ただ単にメダルを獲得したからではなく、あきらめず、ひたむきに努力したからだだと思います。2学期は、みなさんも、明確に目標を決め、人間性も磨きながら努力を重ね、周囲のいろいろな人たちを感動させてください。その時には、小中野中学校全体としてのチームワークを保ちつつ、感謝することも忘れないでください（8月22日の始業式での式辞を編集しました。また、八戸市の伊藤教育長の中学校長会でのお話を引用させていただきました。）